



TITLE:

京都大学言語学懇話会 2002年度活動報告

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学言語学懇話会 2002年度活動報告. 京都大学言語学研究 2002, 21: 369-376

ISSUE DATE:

2002-12-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/87812>

RIGHT:

京都大学言語学懇話会

2002年度活動報告

第58回例会

2002年4月13日(土)

午後1:30~4:45

京大会館102号室

研究発表

西夏文『金剛般若經』における言語特徴

荒川 慎太郎

(日本学術振興会/京都大学)

危機言語問題はいま

宮岡 伯人 (大阪学院大学)

第59回例会

2002年7月13日(土)

午後1:30~4:45

京大会館211号室

研究発表

粒子音韻論の拡張と英語の母音体系

山本 武史

(大阪外国語大学非常勤講師)

ルシの人々は如何に死んだか — umṛēti, přestavitise, skončatise —

佐藤 昭裕 (京都大学)

第60回例会

2002年12月14日(土)

午後1:30~4:45

京大会館211号室

研究発表

インタラクシオンの文法

定延 利之 (神戸大学)

モンゴル語仏典の物語ること — その言語学・文献学的価値 —

樋口 康一 (愛媛大学)

西夏文『金剛經』における言語特徴

荒川 慎太郎

西夏文『金剛般若波羅密多經典』（以下、『金剛經』）諸版は、ロシア科学アカデミー東方学研究所・サンクトペテルブルグ支所（以下、東方学研究所）に最も多く保存されている。1999年、発表者は確認できるかぎりの写本・刊本を閲覧・調査し、この結果を博士論文『西夏文『金剛經』の研究—言語学的研究・校訂テキスト・訳注—』（荒川、2002）として提出した。本発表はこの論文の「研究編」をまとめたものである。

はじめに「西夏文『金剛經』とその周辺」として、東方学研究所所蔵『金剛經』は細かな差異まで勘校すると16種に及ぶこと、『金剛經』といわれていた文献の再整理を行うと、

- A. 『金剛經』…鳩摩羅什訳、金剛般若波羅蜜經（大正235）からの重訳
- B. 『金剛經頌』…經典本文中に頌が付される異本で、梁朝傅大士頌金剛經（大正2732）の訳
…頁上半分に「疏」をもつ。金剛般若經疏論纂要（大正2732）「宗密」注が相当
- C. 『金剛經集』…漢文偽經『金剛經纂』（P. 3024V, S. 2565V）の訳

の三種に分類できることを述べた。また『金剛經』には字句の訂正・文章の増補があり、全文の中に約30項目の異同が検証できる。これに基づき各版の系統を推測した。

次に、テキストとしての『金剛經』が西夏語の研究にどのような貢献をなすかを述べた。

音韻面から見ると西夏語訳『金剛經』は漢語・チベット語・サンスクリット音との対音を有するため、従来の推定音、韻書による音節分類を検証する資料となる。

『金剛經』には、漢夏対音（經典中の借用語など）、夏蔵対音（チベット文字注音資料）、梵夏対音（仏典の陀羅尼）が確認できる。西夏語で記された漢語音・漢語対音からみた西夏語音の特徴、チベット語対音から見た西夏語音、サンスクリット対音から見た西夏語音の諸特徴を順に考察した。『金剛經』西夏語音は各種対音から見るかぎり『文海』標準音を大きく逸脱するものではないが、一部の韻母の音節末鼻音・わたり音に関して『文海』から再構成される音価と食い違いを見せることなどを示した。

文法面を考えると、『金剛經』にみられる特徴的な点は、疑問文とその返答、否定表現・二重否定表現の多用である。また、格標識・位置詞、動詞接頭辞・接尾辞が多数観察される。

これらの表現を例示するとともに、『金剛經』における西夏文の特徴を論じ、『金剛經』の例文が西夏語文法の考察に有用な資料であることを明らかにした。

（あらかわ しんたろう）

粒子音韻論の拡張と英語の母音体系

山本 武史

本発表では、Schane (1984 他)による粒子音韻論 (Particle Phonology) の枠組みを
発展させ、一般米語 (General American、以下 GA) と英国容認発音 (Received
Pronunciation、以下 RP) の母音体系を分析し、さらにこの種の分析において従来
問題であった後舌非円唇母音の表示に関する新たな提案を行った。

本発表では、まず 2 項的素性を用いて英語の母音を分析した先行研究として
Jensen (1993)、Giegerich (1992) を取り上げ、これらには (1)音声的事実が軽視され、
2 項的素性が一部、分類のために恣意的に用いられている、(2)異なる方言を同時に
扱っている、(3)「短母音」と「長母音」・「二重母音」の関係が明らかではない、(4)
扱われていない母音がある、(5)体系上の隙間が説明されていない、といった問題が
見られることを指摘した。

次に、2 項的素性に対するものとして「エレメント (element)」等と称される、
A (開口性)、I (口蓋性)、U (円唇性) といった 1 項的素性を用いる分析を検討し
た。この種の分析として、Lass (1984) の依存音韻論 (Dependency Phonology) によ
る分析と Schane の粒子音韻論による分析を取り上げ、これらにおいても前者には
(1)「依存関係」が抽象的であり、母音を過剰生成する恐れがある、(2)「中央化」を
表す第 4 のエレメントを導入している、といった問題が、後者には (1) a 粒子(A
エレメントに相当)が多義的である、(2) a 粒子の最大個数が何によって決定される
のかが明確ではない、といった問題がそれぞれあることを指摘した。

これらの問題点を解決すべく、本発表では (1)「依存関係」を用いず、(2) A、I、
U 各粒子とも最大 2 個まで使えるようにし、この枠組みを用いて GA と RP の母音
体系を分析した。その結果、「質の対立」と言われる GA の母音体系は、(1)すべての
母音音素の粒子構成が異なる、(2)量は質から自動的に導かれる、という性質を持
った体系で、「量の対立」と言われる RP の母音体系は 6 母音の長短の対立を基本
とした体系であることが明らかになった。

最後に、従来問題であった後舌非円唇母音の表示に関して、3 つの粒子に階層性
を認め、その階層性の違いによって日本語・トルコ語などの後舌狭非円唇母音 [u] を
ŪŪ、ロシア語・中国語などの中舌狭非円唇母音 [ɨ] を Ⅱ とすることを提案し
た。

(やまもと たけし)

インタラクションの文法

定延利之

これまでの認知的な言語研究では、イメージスキーマに関するものがほとんどで、認知者と環境とのインタラクション (interaction) や、認知者の情報帰属 (attribution) は事実上無視されてきた。だが、インタラクションや帰属は認知の中核に位置するもので、言語表現にも大きな影響を及ぼす。従来の「イメージスキーマの文法」に注意を払いつつも、インタラクションや帰属と、文法との接点を積極的にはかりたい。そうすることによって、従来まったく無関係なものとして別々に記述されてきた言語表現どうしが、実は驚くようないくつかの共通点を持っていることが、言語を越えて見えてくるのではないか—以上の認識のもと、本発表では現代日本語（共通語）の7つの言語現象を取り上げ、特に「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」については現代中国語（普通話）との対照もおこなった。主な結論は以下3点である。

第1点。認知者と環境とのインタラクションには、認知者から環境への働きかけの部分と、環境から認知者への働きかけの部分がある。話し手が或る情報（たとえば情報「四川料理には辛いものも少しある」）を知識（「四川料理には辛いものも少しある」など）として表現せず、認知体験（「四川料理には辛いものときどきある」）として表現できるのは、インタラクションのいずれかの部分が活性化し、そのインタラクションを中核とする認知体験が強烈なものになる場合である。第2点。認知者から環境への働きかけの部分は、探索意識（環境にかける意気込み）によって活性化する。このことは「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」「変則的に見える助詞『で』」「発見を表すかに見える助詞『た』」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」などの表現に見ることができる。上述の「四川料理には辛いものもときどきある」が、四川料理人（四川料理を知悉しており今さら探索しそうな人間）の発話というより、四川料理をあまり食べつけない素人（四川料理を探索しそうな人間）の発話らしいことは、この例である。第3点。環境から認知者への働きかけの部分は、体感度（環境から認知者が受け取る情報の強烈さ）によって活性化する。このことは、「度数表現＋アリサマ表現」「『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」「情意表出表現」に見ることができる。たとえば「私は3回痛かった」に比べて「私は3回赤かった」の自然さが低いのは、痛みが原初的で体感度が高いが、赤さは認知に色彩判断を要し、体感度があまり高くないからと説明される。

（さだのぶ としゆき）